

(様式第7号)

地域の課題解決のための活動報告

記入日：令和5年6月13日

作成者：佐伯 比呂美

地域の課題解決のために行った活動を1つ選び、できるだけ具体的数値を挙げて報告してください。すべての項目に、一般の人に伝わりやすいようにご記入ください。

*この報告はあしや市民活動センターのホームページに掲載されます。

(登録を公開している団体のみ)

団体名	
特定非営利活動法人あつとオーティズム	
事業名	日時(期間), 場所
Light It Up Blue Japan ASD(自閉スペクトラム症)および発達障がい啓発活動	日時: 2022年4月2日~8日(準備期間 2021年9月~、事後報告等事務手続き、パートナー協力者へのお礼状・報告6月中旬~下旬) 場所: 全国各地
内容(実績) *実施したことを具体的に	受益者数
「ライト・イット・アップ・ブルー Japan2022」日本各地への普及 ライト・イット・アップ・ブルー(LIUB)は、世界中がつながりオーティズム(自閉スペクトラム症/ASD/発達障がい)の啓発を行うキャンペーンです。当法人は今年度もLIUB日本大使としてLIUB Japan実行委員会を立ち上げ、県内外の実行委員とともに関連機関、団体、一般企業、一般市民の皆様を含む全ての人々への呼びかけを目標にLIUBキャンペーンを開催しました。福祉のを枠をこえ誰もが参加できるLIUBキャンペーンを通じて日本国内の賛同者がつながりASDおよび発達障がいの啓発活動を行い社会理解を推進し多様性社会実現を目的としています。 具体的に実施したことは * LIUB Japan 2022開催にあたり、メールや書面で県内外の団体・企業に協力依頼を行った。 * 厚労省と連携し各地自体に呼びかけた。 * LIUB Japan2022パートナーを募り情報を共有した。 * SNS、YouTubeなどを活用しASD(自閉スペクトラム症)の特性について理解を呼びかけた。 * LIUB2022の各地のライトアップを掲載した動画を作成し配信した。 * セルフィサインでの自治体首長リレーを呼びかけた。 * 各地から提供された啓発活動の情報を拡散できるようホームページ、フェイスブック、インスタ等でシェアした。 * 配送用ダンボールに啓発デーの情報を印刷し周知した。 * ご協力いただいた方へ報告(写真ダイジェスト)とお礼状を送った。 * 神戸、大阪の企業7社から協賛を得た。 * 内閣府・厚生労働省・文部科学省・外務省・国土交通省・一般社団法人日本	全国各地で不特定多数
	参加者数

<p>自閉症協会・一般社団法人日本発達障害ネットワーク（JDD ネット）など 12 カ所の後援名義を得た。</p>	
<p>成果（社会へのインパクト） *どのような良い変化を社会にもたらしたかを具体的に</p>	
<ul style="list-style-type: none"> * 各地でのイベントやライトアップにより自閉スペクトラム症および発達障がい啓発が進み社会理解が深まるきっかけになった。 * 福祉の枠を越えて誰もが簡単に参加できる LIUB キャンペーンは企業や一般の方の協力を得やすいため、多様性社会の入り口として受け入れてもらいやすかった。 * 全国展開のキャンペーンをすることにより、点と点がつながりより幅広い啓発活動の周知を可能にした。各自治体での取り組みが広がった。 * 全国各地で LIUB にちなむブルーアクションが行われるようになった。ライトアップが 344 カ所以上で行われた。 * 全国各地のパートナー登録団体・企業などの協力者が増加した。 * 神奈川県黒岩知事が首長リレーについて LIUBjp 実行委員長から全市町村にズームでご説明する機会を設けてくれた。結果、オール神奈川で首長によるセルフサインでの応援があった。（首長の参加により神奈川県での活動が盛んになった。） * 各地の取り組みがメディアで取り上げられた。 * 福祉以外の分野で少しずつ理解が深まっているため学校、就労、公共の様々な場面で配慮が行われ過ごしやすくなってきている。 	
<p>今後の展望（どのように継続、発展するか）</p>	
<ul style="list-style-type: none"> * 多様性社会にむけ大変意義のある活動と位置付けられる。幅広い啓発の継続が大変重要であるため、止まることなくさらに全国の支援者がつながって活動することが大切。 * 社会の理解が進んでくると、様々な場面で支援の手が差し伸べられる。聞こえ方や見え方の相違（過敏または鈍感）から起こる困難があることを知ってもらうこと。個々のほんの少しの配慮が社会を大きく変えていく。そのためにも継続が重要である。 * 慢性的な人手不足の課題に取り組む。 * 誰もが世界自閉症啓発デーを楽しむことができるような企画（食やファッションなど）が徐々に各地で実現されている。 * ASD のある子ども（人）が主役のイベントを企画したい。特性上、さまざまな経験することが最も大切であるにもかかわらずその機会が作られていない。オーティズム・フレンドリーという概念を広めていきたい。 	